

「海部軍団」ということばが、マスコミによって紹介された。日商岩井の権力者海部某氏を頂点とする利権集団をさすことばのようである。いわば利権によって結ばれた一つの人脉である。利権をきずなどするかぎり、利得関係の崩壊とともに、集団もまたくずれさる。かつて日本の大学にも、

軍団的権力構造は存在した。いや、現代でもその後遺は根強く存在してもいよう。

「白い巨塔」ならぬ微塔は、まだ数多く残っているに違いない。立命館大学は、い

ちはやくこの塔を意図的に解体した。文学部にかぎって言えば、専攻ごとの主任体制の改善である。

「主任教授」ということばは、もはや立命館大学には存在しない。

専攻主任は、教授が輪番でこれに当たっている。専攻主任は、かつての助手がその任務とした業務に

も当たっている。これは、かつての「学園紛争」の結果がもたらした学園民主化の貴重な成果の一つである。

例年、立命館大学文学部にも、多くの大学から専任教員の公募が来る。日本文学専攻にも、全国の国公立大学からの公募がある。

専攻という名の秩序

水田 潤

これを処理するのも専攻主任の業務である。専攻主任は、人事の公正・適正を期するために、これを専攻会議に図って処理する。大学からの求人だけでなく、高等学校などからの求人への対応も同様である。日常的身辺的な諸問題も、この方式によって処理している。

あえて民主主義などということばを必要とはしないが、このことが人間関係や学問・研究の向上に寄与していることも事実である。専任教員は、卒業生の方々や院生・学部学生に対して、つねに等距離であろうとする発想も、ここから生まれている。人脉への定住は、

一つの旧態による調和ではあっても、美徳ではない。

私はかつて「日本文学会ニユース」No. 20で、「一つの笑顔、一つの握手と同時に、私たちは相互に峻烈な批評者でなければならぬ」と

自戒したが、もとより批判は誹謗ではない。多様な学風を期待した新しい専攻づくりも意図している。「立命館大学日本文学会」に結集される皆様方のご援助とご協力をお願いしたい。「立命館大学日本文学会」のビスタ・ビジョンも、皆様とともに模索したい。